

小説教材へのNIE導入の試み

——登場人物に直撃インタビュー！舞姫の真相を洗い出し、社説を書く——

畝岡 睦実

はじめに

前任校から、教科指導をはじめ生徒会活動・H・R活動などに広くNIEを活用してきた。複数の教科のコラボレーションでもたびたび行った。中でも、新聞記事から情報収集し、生徒たちが作ったデータベースを使った作文指導は、年次進行で繰り返した。生徒は三年間で大量の記事を読み、考えをまとめ、発信した。

生徒の投稿に次の一節がある。「NIEの取り組みでいろいろなことを体験してきた。次は何をするのだろう。『NIEファイル』を読み返すと、わくわくした気分になる。学校が楽しくなってくる。NIE活動の素晴らしさを肌で感じている。こうしたNIE活動をキャリア発達の観点から見たとき、その果

たす役割は大きい。

また、新たな試みとして、先日、他府県の二校と合同でNIEに取り組んだ。「生徒が主体的に自分の学習活動を意味づけること」（メタ認知）がねらいだ。自校の特色を明確にするために、遠隔地で連携した。ICTの活用によって、それが可能になった。

共通教材の『平家物語』と独自に選んだ教材とを組み合わせ、各校で授業を行った。その様子を各自で記事にまとめた後、班で紙面を編集した。「授業の目的は「授業で資するべき力は」。おのずとそれらが話題になる。自分たちの価値判断を他校の生徒とぶつけ合った。ある生徒は「友人間の『会話』ではなく、分かり合うには『対話』が必要だった」と話す。「対話」を通じて、紙面には一つの「軸」があることも発見した。メディア・リテラシーの学習がここにある。

主体的に思考し、自らを相対化・対象化し、「ことば」でまとめることの重要性、そして他者に対して表現することの喜びを実感させたい。自ら問いを立て、本質を見抜いていく力を涵養したい。それには、主体的に伝え合う活動の場を設定することが肝心だ。NIEはそれを実現する。

昨今、NIEに関する研究において、こうした効果を評価し、三年間を見通したカリキュラムの必要性が取り上げられている。確かに、「新聞作り」や「新聞スクラップ」をはじめとして、新聞や新聞記者のノウハウを活用する様々なNIEも、他の学習活動と同様に計画的に行われなければならない。しかし、そのようなNIEの「カリキュラム化」の動きが、それぞれの学校のカリキュラムに新たに単元として追加しなければNIEは行えないという誤解を生んではいないのか。

NIEが、既存の単元でも、そのねらいの達成に効果を上げることが可能である。そこで、教科書教材の学習に、NIEの導入を試みた。今回は、その実践の一つとして、定番教材と言われる『舞姫』（森鷗外）を用いた「読み」の学習を報告する。

一 授業の実際

(一) 単元の概要

日時	平成二五年度一学期
対象生徒	岡山城東高等学校普通科三年次生
科目名	現代文（東京書籍「精選 現代文」）
単元名	舞姫の真相に迫る
学習材	『舞姫』（森鷗外）

(二) 生徒観

本校生徒全般がそうであるように、何事に対しても明るく積極的な生徒が多い。特に様々な学校行事において、楽しみながら、主体的で積極的な取り組みを行うことができる。ただ、今日的な問題点として、若者のコミュニケーション力不足が度々指摘されているように、集団の中で、自己の意見を他人に伝えることを躊躇する傾向は少なからずある。そこで、生徒自ら伝え合う活動を行う場を多く設定することで、主体的に思考し、自らを相対化し「ことば」でまとめることの重要性、ならびに他者に対して表現することの喜びを実感させたいと考えている。そのため、国語の学習においては、伝え合う力を高めるこ

とを目標に、グループ学習を基本とした学習を行っている。

本教室の生徒は、三年次生になって初めて担当した生徒たちである。残りわずかな高校生活ではあるが、可能な限り、バズセッション・パネルディスカッション・ディベート・プレゼンテーションなど多様な学習の場の設定を行うことで、より主体的に楽しみながら学習を行えるように工夫していきたい。

(三) 単元のねらいと学習指導要領との関連

本単元では、「現代文」の定番教材である『舞姫』を教材にして、小説を読む方法を見つけ、豊かな読解力を養うことを目標にする。日本近代の黎明期を生きた青年の内面を描く、近代日本文学を代表する作品『舞姫』。近代的自我の覚醒とその挫折の問題として語られることも多いが、主人公太田豊太郎が、ドイツ女性との悲恋を回想記の形式で語る本作品は、いくつもの謎を抱えており、様々な読みを可能にする。明治の文体は、生徒にとって少々難解であるが、それに臆することなく、作品の価値に迫りたい。その手立てとして、登場人物にインタビュウを行う場の設定をした。

これによって、虚構の世界はリアルなものとなり、おのずと表現を手がかりに登場人物の心情に迫ることになる。学習指導

要領の内容の取扱い(1)には「話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことについて相互に密接な関連を図り、効果的に指導する」とある。ねらいに応じた豊かな活動を通じて、生徒の読解力や表現力を向上させ、言語能力を育成したい。

(四) 指導観

新聞記事を活用するだけでなく、新聞記者になりきって取材をしたり記事を書いたりするのも、NIEの手法の一つである。今回は、〈インタビュウによる取材〉(論説会議を踏まえた社説の執筆)という新聞作成の重要なプロセスを学習の場に取り込むことにする。『舞姫』の読解を深める手立てとして、豊太郎やエリス、友人の相沢謙吉等にインタビュウを行う。「豊太郎とエリスの間に愛はあったのか」「問題はどこにあるのか」。豊太郎の手記を入手した新聞記者が、妊娠し狂女となったエリスを残し、豊太郎一人が帰国した出来事の記事にするべく、関係者にインタビュウする。また、インタビュウには必ず目的がある。今回は、洗い出した内容をもとにして、論説会議を各班で行った後、各自で「社説」を書き、深化した読みを形にする。生徒自身は、伝えたい内容を精査しながら、どうしたらよりよく伝わるのかを考えて、見出しを付け、記事を書く。新聞の「書

き方」には、読者に分かりやすく伝えるための工夫がある。「伝える」ことにおいてプロである新聞記者たちが、築き上げた技能やノウハウである。そこには長い伝統がある。学習活動を通して、生徒たちは、それらを体験的に身に付けていく。学習者の「言語運用能力」の向上を期待したい。

同時に、このように「伝えるとはどういうことなのか」を体験することは、新聞というマスコミニケーションの特性の理解へとつながっていく。すなわち、実社会で生きた力として働くメディア・リテラシーの涵養をも期待できる。

(五) 単元目標

○初期の近代小説を読み、近代が負った課題をどのように取り上げ、どのように描いたかを確かめようとする。

(関心・意欲・態度)

○他者との交流をしつつ、小説を味読することによって、人間・人生・社会への関心を深め、洞察力を養う。

(読む能力)

○登場人物の行動、心理、性格を読み取る方法を獲得し、作者のものの見方、感じ方を理解する。

(知識・理解)

◎指導計画全九時間

時	学習活動	指導上の留意点
1～4	<ul style="list-style-type: none"> ・単元の目標「小説を読むコツを見つけ、小説を味わう」と計画を確認する ・「舞姫」を通読し、年表を作成する 	<ul style="list-style-type: none"> ◎事前学習として、インタビュ記事や社説に目を通しておくように促す。 ◎主人公の履歴や心情を中心に、ワークシートをまとめさせる。個人の読み取りを丁寧に行わせながら、班やクラスで確認させあらずしを正確に把握させる。引っかかりを感じた点を挙げ、インタビュの手がかりとする。
5	<ul style="list-style-type: none"> ・質問や返答などインタビュ計画を練る 	<ul style="list-style-type: none"> ◎登場人物、担当新聞記者を班員それぞれで分担する。役割ごとに班(専門班)に分かれ、質問やその返答を想定させておく。 ◎一問一答で終えるこのないよう、必ず関連質問を行うこととする。それに臨機応変に対応できるように、作品をしつかり読解しておくよう指示する。(学校図書館と連携し、「舞姫」に関するフェアの開催も有効である。)
6	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物にインタビュを行う 	<ul style="list-style-type: none"> ◎社説を書くためのメモを取らせる。ここでメモを取る方法の指導を行う。
7	<ul style="list-style-type: none"> ・「豊太郎とエリスの間に愛はあったのか」「問題はどこにあるのか」をテーマに話し合う 	<ul style="list-style-type: none"> ◎班に戻し、専門班での理解を助けに話し合わせる。話し合いの前には、自分の意見をワークシートにまとめる時間を十分確保し、自分の意見を明確に述べることをできるようにする。
8	<ul style="list-style-type: none"> ・「舞姫事件」の社説を書く 	<ul style="list-style-type: none"> ◎各自に新聞を配布し、社説の書きぶりを理解させる。 (社説のリライトなどによって、社説の構成を理解させることも有効である。)
9	<ul style="list-style-type: none"> ・書き上げた社説を読み合い、作品の価値を理解する 	<ul style="list-style-type: none"> ◎生徒の社説集「舞姫の真相に迫る」を配布し、相互に評価させる。 (社説に対する投書を書くことで、他の意見に触れさせることも有効である。)

(六) 具体の評価規準

・ 初期の近代小説を読み、近代が負った課題をどのように取り上げ、どのように描いたかを確かめようとしている。

(関心・意欲・態度)

・ 他者との交流を通して、小説を味読することで、人間・人生・社会への関心を深め、洞察力を養っている。

(読む能力)

・ 登場人物の行動、心理、性格を読み取る方法を獲得し、作者のものの見方、感じ方を理解している。

(知識・理解)

(七) 授業の様子

1 第一次(第1時〜第4時)

：単元の日標「小説を読むコツを見つけ、小説を味わう」と単元の計画を確認し、『舞姫』を通読し、年表を作成する。

本小説の読解として、文語体の表現を味わいつつ、書かれた内容を正確に読み取ることが先ず求められる。『舞姫』は、「古典」の学習とも接続させ、三年生であるならば、日本語の美しさを実感して欲しいところではあるが、普通科である本校生徒

にとっても、それはなかなか難しいのが実態である。そのため、細部にこだわらず、逐語訳に終始する授業に陥ってしまう危険性があった。そこで、課題を朗読・「年表」の作成・「問い」の作成の三つに設定し、これらを事前学習として行ってから授業に臨むようにあらかじめ指示した。

授業では、段落ごとに、まずは段落担当者の朗読を聞いた後、年表の内容の確認を個人↓班↓クラスの順番で行うことで、書かれている内容を正確に読み取らせた。朗読を担当した生徒は、文語体の表現にとまどいながらも、より登場人物の心理や状況が反映した朗読になるように意識し、工夫しながら各授業で朗読した。たどたどしい読みであった生徒がいたことも否めないが、大半の生徒の朗読には、流麗な雅文体の味わいを伝えようとする意欲が感じられた。朗読するうちに、はじめは雅文体の難しさゆえ悲鳴を上げていた担当者たちも、少しずつ内容に関する理解が進んでいった。

さらに、それぞれが「なぜそこにそのように書かれているのか」という視点で着目した「問い」を相互に交換し、その「答え」を話し合った。その過程で、事前にまとめてきた年表が自ずと資料となり、追記訂正する箇所の確認も行った。

2 第二次(第5時〜第6時)

…「社説」を執筆するために、登場人物にインタビュ
ーを行い、『舞姫』の読解を深める。

『舞姫』の読解を深める手立てとして、登場人物役の生徒に
新聞記者役の生徒がインタビュアーを行う。教室内の一〇班(学
習班)を登場人物役担当班と記者役担当班の二つに分けた。さ
らに、それぞれの班内で役割分担をした。登場人物班では、主
人公の豊太郎役、愛人のエリス役、友人の相沢謙吉役、そして
その他の登場人物(例えば、豊太郎の母親、エリスの母、官長、
天方伯、シャウムベルヒなど)、もう一方の記者役担当班では、
豊太郎担当の記者役、エリス担当の記者役、などというように
分担したのである。

まずは、ジグソー法を用いた活動を組み込んだ。役割毎に班
を再編(担当者班)し、以下の二つの課題にそれぞれ取り組んだ。

(1) 登場人物担当班

…○○(○○は担当の登場人物)の見る「舞姫」事件
という視点でまとめる。

(2) 新聞記者役担当班

…「悪者は○○(○○は担当の登場人物)である」と
いう前提で、その根拠を話し合う。

その後、学習班で報告を相互に聴き合うことで、特定の視点
に偏ることなく、「読み」が進むように工夫した。

次には、再度担当班となり、インタビュアー計画を練った。一
問一答で終わることのないように、相手の答えを想定しながら、
質問を考えるように指示した。『舞姫』を熟読することが自然
に求められていった。第一次では、踏み込みきれなかった「読
み」の段階へと話題は進んでいく。複数名(今回は五人班)の
生徒が協同して、インタビュアーを練り上げていくために、その
班内での「読み」の違いが計画段階であらわになり、議論が生
じた。衝突すれば、説得が必要となる。対話を通じて、納得や
共感をしながら、計画が完成していった。

本時では、新聞記者にチームティーチングの形式で授業に
加わっていただき、インタビュアーのコツについて、ミニ講義も
行った。全てのクラスへの協力は困難であったため、いくつか
のクラスでは、講義の様子を映像で視聴し、その代替とした。

その後、インタビュアーとなったが、その際、どの役の生徒も、
教科書を何度も見直しながら受け答えをしていた。想定外の質
問や答えに慌てながらも、班で「読み」を確認し合いながら、
インタビュアーは進んだ。質問は、班のメンバー全員が必ず行う
ことを条件にし、時間制限を設け、的を絞った質問を心がける

ように促した。

また、共同インタビュ어의想定であることを伝え、担当の時はもちろん、担当でないインタビュ어의やりとりもメモをとることも併せて指示した。第三次で「社説」を書くためには取材メモは重要である。何を記録するかに苦戦した生徒も多く、別単元において「聞く・話す」の領域での学習へとつなげていきたい。

図書室ではこの単元と同時に、「舞姫」フェア」と題して、『舞姫』や「森鷗外」に関する書籍を、岡山県立図書館から借り受けたものも併せて並べた。図書委員たちが制作したPOPを用いた目を引く展示となった。

3 第三次（第7時～第9時）

…論説会議を開き、それを踏まえて「社説」を書く。書き上げた「社説」については、それを読み合い、作品の価値を理解する。

インタビュ어의後はやはり記事を書くべきである。そこで今回は「社説」を書くこととした。「社説」とは、新聞社の考えや意見を色濃く発信する記事である。ストレート記事とはまた異なる性質の書きぶりである。新聞社の見解の表明なので、重い責任があり、論説委員たちが議論を尽くし、方向性を決定す

る。その点で、「社説」の執筆が、今回の『舞姫』の最終段階として、より学習効果の上がる学習課題であると考えた。また、『舞姫』は決して「悲恋物語」ではない。「近代が負った課題」の中で、主人公は苦悩、挫折していく。「近代的自我の覚醒と挫折」。そうした「明治」という近代日本の黎明期を生きなければならなかった一人青年の物語であることに気づいて欲しい。「社説」執筆は、生徒達の「時代」への意識を呼び起こしてくれるものと考えた。

まず、「社説」を書くためには「論説会議」が必要だ。「問題はどこにあるのか」「豊太郎とエリスの間に愛はあったのか」をテーマに班ごと（学習班）で話し合った。様々な登場人物の視点からの「読み」がぶつかりあい、白熱した議論になっていった。「社説」は「舞姫事件」の真相について全員が書いた。この時には、各自に一般紙を配付し、社説の書きぶりを理解させた。三年次生ではあったが、普段「社説」に目を通して生徒は少なく、「社説って何?」「どこにあるの?」という声も聞かれた。そこで、新聞を教室に持ち込んで、「社説」を読み比べる時間を取った。実際に「社説」を書く時には、お気に入りの「社説」を切り抜いて、持ち込んでくる生徒もおり、驚かされた。さらに、書けなくて困っている生徒に対しては、「社説」

の型をリライトしながら、書くように助言した。

書き上げた「社説」は、完成後クラス内で相互に読み合い、評価しあう活動を行った。次に、二人の生徒の「社説」を生徒自身が付けた「見出し」とともに掲載する。

・「舞姫事件の真相を探る」

豊太郎とエリスの間にあつたものは果たして愛だったのだろうか。きっと豊太郎にとっては、本当の愛に違いなかったのではないか。この悲劇は、旧来の日本から劇的に変化した現代、すなわちこの「明治」という時代の特異性が引き起こしたものだと思える。

我々が生きているこの時代は、西洋から入ってきたものを受け入れ、未来に向かって革新的に進んでいく気運のある一方で、旧来の民族的、階級的なものに囚われる人間も数多く存在し、その両者の間で価値観がせめぎ合い、めまぐるしく変化する激動の時である。

豊太郎自身は、ちょうどその「明治」という時代を体現する男であり、西洋人であるエリスとともに生きる人生を望みつつも、彼は結局、身分至上的な価値観を大事に抱えて放すことはできなかつたのだ。

時代が移ろうにつれて、人の考えも変われば価値観も変わる。少し時間がたてば、この男を優柔不断な男だと断定してしまうかもしれないが、豊太郎とエリスの恋は、我々が生きる時代「明治」の恋の「限界」だったと考えることはできないか。

二人の恋路を阻もうとした相沢や官長たちの行動も含めて、この事件の至る所に江戸的・明治的な考えが隠れている。そんな周囲の状況も考えると、豊太郎の愛が本物でなかったと我々が断定してしまうのは気の毒ではないだろうか。

彼が自分を取り巻く〈物語〉を手記にしているのは、彼自身、古い価値観にとらわれていた自分を乗り越え、新しい自分を見つけようと努力しているからであろう。

いつの時代も若者たちは間違いを犯し、傷つきながら成長していくのである。

・「シリーズ・プレッシャーに弱い若者たち(下)」

近年、親や周囲の人々からの過度の期待に押し潰された若者たちによる犯罪が絶えない。シリーズ最終回となる今回は、「舞姫事件」に焦点を当てる。

明治の世を震撼させた「舞姫事件」の真相が明らかになっ

てきた。そのあらましはこうである。一流名門大学出身官僚による「女性妊娠見放し事件」。犯人は二十六歳の青年、太田豊太郎。彼は、早くに父を亡くしており、唯一の肉親である母親にとても従順な少年であった。彼は、そんな母親の期待に応えるべく、予備學を経て、一流名門大学へと進学する。その優秀さゆえ、十九歳ではやくも学士の称を受けた彼は、洋行の命を受け、留学生として伯林の地を踏む。

当時の留学生仲間の一入、林さん（仮名）は、留学生時代の彼をこう振り返る。「彼は信じられないほどの堅物で有名だった。彼は、全く人と交わろうとしなかった。ピリヤードに誘っても乗ってきたことは一度もないし、酒などはもつての外。ピールの本場にいるのに、一滴も飲もうとしなかった。正直、彼がこんな事件を起こすなんて。本当に信じられない。」誰よりも真面目で、学業に熱心だった青年をこのような犯行に向かわせた原因は何だったのだろうか。

専門家の一人は、彼が幼少期から周囲の過剰な期待を背負って生きてきたことを指摘している。それは、母親に「活きたる辞書」とされ、外務省に勤めていた頃の上司からは、「活きたる法律」とされていたほどであるという。そして、この頃から彼は、大学の講義からは足が遠ざかり、上司に対する

挑発的な言動が目立つようになってくる。豊太郎は、当時の心境をこう供述している。

「私は恐ろしかった。このまま誰かの望み通りの道を歩み続け、一生を終えてしまうのではないかと。しかし、そんな私は欧州の風に当たることで変わった。もつと、自分らしく生きたいのだと思うようになった。エリスに声を掛けしたのは、心の奥底にあつた変身願望から。結果的に彼女を援助したのも、単に私の願望と彼女の要望とが一致したからに過ぎない。」

では、二人を結びつけていたのは、愛ではなかったのか。「確かに最初は打算的に始まった私とエリスの関係だったが、私は次第に彼女に魅了されていった。しかし、私のエリスへの愛は長くは続かなかった。昔からの同僚である相沢謙吉に再会してしまったから。彼に出会うことで、私は危機感を抱いた。自分は人生を誤ったのではないかと。本当の時に自分が歩む道は、キャリアの道ではないかと。」

彼の供述からは、彼の心の移ろいややささと機敏さが見て取れる。おそらく彼は苦しみながら成長していく間に、「外圧に抵抗しない」という処世術を編み出していったのではないか。

しかし、その生き方は脆く、常に誰かを裏切る危険と表裏一体を為している。海外に更なる門戸を広げていこうとする風潮の強い昨今、このような考え方を持つ若者層は更なる増加の傾向を見せるであろう。その時、私たちの社会は彼らをどのように受け止めていくべきなのか。今私たちの社会には、確立された自己と外圧の動じない個々人の成熟、そして横のつながりが求められている。

二 成果と課題

「なぜ、豊太郎はこのようなことをしたのか」「この時、エリスはどのような気持ちだったのか」「相沢は、いったい何を考えていたのか」。インタビューでは、全ての登場人物の立場に立ち、数々の「問い」に答えなければならぬ。生徒は、そのやりとりを通して、そこに描かれた「事実」が、豊太郎の語る「事実」であることに気付くことができていた。(語り手)は、その関心事によつて、「事実」を改変できる。(語り手)は、登場人物の有りようやその関係性までも書き換える。生徒は、豊太郎の(語り)を通して、「物語」における(語り手)の存在を意識するようになる。そして、その(語り手)の中に「時代」

を発見する。その気づきを確かにしたのが、「社説」の執筆であった。

授業後に、ルーブリック(生徒の自己評価シート)を用いて、授業の振り返りを行った。そこには、インタビューや「社説」の執筆というパフォーマンス課題を通して、登場人物の心情により深く追ろうと試み、そのために他者と積極的に対話している姿が顕れていた。また、自己の能力がいつも以上に発揮されたパフォーマンスに満足している姿も見取れた。生徒たちの主体的・協同的な学びがあったことが窺える。これらは、生徒の感想だけでなく、授業者の観察でも感じられたことである。生徒の感想の一部を次に取り上げる。

・舞姫は一度読んでみたいと思っていた作品なのでここまで細かく学ぶことが出来て良かった。畝岡先生の熱心さにどうにかついて行けたと思います(笑)。ただ、難を言えば机を付けるのが少し面倒でした。舞姫を通して、豊太郎側の意見、エリス側の意見、またはその他の人の意見を自分たちでそれぞれ考えたことで、自分一人では必ず持ってしまう先入観や一般論で見えてしまうけれども、少し深く読むと、その話の世界がどんどん広がるということを感じ、感動しました。ま

た、社説を書くことによって、今まではほとんど読んだことのない新聞に関心が湧きました。そしてこんなにすごいことが書いてあるのに、記者が一生懸命取材をして文章を書いているのに、すぐに捨てたり、工作に「身の回りにあるもので作ろう」的な感じで、びりびり破いたりするのは残虐ではないかと新聞への価値観が高まりました。

・『舞姫』を本人たちになりきって、インタビュー形式で授業を進めていくとき、最初は登場人物たちのはっきりと言葉で書かれていない心情を情景や描写などから読み取らなければならなかったのが難しかった。でも、慣れてくると「この情景はこんな気持ちを表していたのか」と分かりだしてどんどん楽しくなっていく。このインタビュー形式は、一人一人が物語を深く読み込む必要があるし、単に受身の授業ではないので、物語を読み取る力が前より付いたと思う。準備は大変だったけれど、個人的にはすごく充実した授業でした。先生が突っ込んでくるところは、いつも鋭くて毎回「なるほど！」と思います。

・いろいろな今までにないことが出来て楽しかった。また発表や論説など、普段やらないことの練習が出来た。インタビューの時に緊張して、冗長で要点のぼけた質問をたどどしくし

てしまった。結果、相手にも周囲にも質問の意図が伝わらなかったのが悔しい。(的外れの返答が返ってきて、問い直そうとしたところで時間切れになったのも悔しい。) 論説文も、なんとかまとめるもまいまいちこまかしているような気がした。観念とかで煙に巻いて、それらしくまとめてあるところが実のない自分の一番嫌いなタイプの文章になっている。

・ただ自分の席で読んで話を聴いての授業より断然面白かった。舞姫の裏話を自分たちで考えてみたり、一人の登場人物について詳しく考えたりすることで、より興味を持った。

・授業外で準備が私にとっては必要だったので、それが少し大変だったけど、作品を深く味わうことができ、とても印象に残っている。毎時間ハードではあるが、物語を多面的に見られるようになるので、良い授業だったと思う。

・この『舞姫』の授業は、消極的な私にとって少し憂鬱な時間だと感じたこともあったけれども、自分の意見が言えるようになったり、社説を書き終えた後の達成感を味わえたりしたので、とてもよかったです。

・記者と本人役に分かれて行ったインタビューでは、同じ話を読んでいるのに人それぞれで見解が異なっていてとても面白かった。僕も自分の意見をしっかり述べる事ができた。

『舞姫』のインタビュをする事によって、小説を読むときに、登場人物の心情をより深く考えるようになった。

次時の單元「近代を理解し、現代を考える」は、中心教材を「『であること』と『すること』」（丸山真男）とした。あの生徒がその学習で提出したレポートを次に取り上げる。作品の持つ「時代性」まで踏み込んだ『舞姫』の読みがなされていたことが、はっきりと分かるレポートであった。

・豊太郎は、伯林に渡るまでは周囲からの期待により、「あるべき自分」を達成しようと、「である」論理に従順な生き方をしていて、本人も強くそのことを自覚していた。しかし、「する」論理が発達している欧米、伯林の地を踏んだことで、彼は「する」論理に目覚める。そして、人一倍繊細な感覚を持つ彼だからこそ、自分が「である」論理に支配されているという自覚が募り、自分が今までの人生で磨いてきた人生観と新たな価値観との軋轢に翻弄される。

だが、彼の気づきは的を射ていたとは言い難い。それは、まるで文明開化、そして急激な西欧化を押し進める中で、脈々と続いてきた伝統をいともたやすく捨ててしまった過去の日本のように、ただ盲目的に先進的な価値に飛びついてい

るだけである。

彼はその価値が、今の自分にとって、本当に意味があるものかどうかの吟味を忘れてしまっていた。それは、『舞姫』の終盤部分において、豊太郎が、結局は「である」価値が息づく世界へと帰って行く場面が証明している。つまり、彼は「である」という価値観に敗北したのである。

今回の実践では、生徒の感想に、数は少ないものの、「雅文体が難しすぎて、一度読んだだけでは内容を理解しきれなかったので、先生が説明してくれる授業がよい」「年表を作るのに一生懸命になりすぎて、内容を掴みきれなかった」という声もあった。また、「この時期なのでセンター試験対策の授業がしなかった」「楽しかったが、定期考査の対策に困った」などの不満の声も幾分聞かれた。

確かに、第二次、第三次の段階で生徒自身が読み解いてくれればと考える余り、第一次で難解な字句にとまどい、内容理解ができないままの生徒を少なからず混乱させていたと思う。それぞれの段階で、どこまで読み深めておくか。生徒の実態を見極め、先を見通した指導がどれほど適切にできていたのか、反省すべき点である。

しかし、学習の時期については、三年生であっても、このような協同的な学習を通しての学びを経験させたいと考えている。また、主人公の生き様を通して、「自己のあり方」を問う本教材は、時代を超えた名作である。そうした意味で、最終年次である三年生に『舞姫』はふさわしい教材ではないかと思う。ただ、一部の生徒にはあるが、この授業の目的が十分伝わらない面があったことは、とても残念である。次回の課題としたい。

おわりに

『舞姫』の授業については、様々な実践が報告されている。今回、NIEが、『舞姫』の効果的な学習の方策であることを確信できた。今後も、「豊かに」「主体的」を意識する余り、「活動あつて指導無し」—そのような展開に陥ってはなにかを常に確認しつつ、様々な可能性を持つNIEを効果的に活用していきたい。

(うねおか むつみ／岡山県立岡山城東高等学校教諭)